

△ 討 論 △

(北原) 地域複合についてふれられたが、これは農業の地域複合のことか。また、ちばた懇談会では自主的にこの問題に取り組む姿勢はなくて、自治体サイドで問題が提起されているのが現状だということか。

(坂本) 私は、農業経営様式としての地域複合も含めて、別の意味で使っている。私が地域複合というのは、一種のエコノミック

アンド ソーシャル コンプレックスという意味合いを含んでいる。つまり、地域内でのアクティビティを高めていくための複合体である。従来、農村社会学では、農村社会の近代化にもなつて、伝統的集団が分化するとされている。しかし、機能集団と機能集団の関係、伝統的集団と伝統的集団との関係、さらに、伝統的集団と機能集団との関係ないし複合については、あまり問題にされていないのではないか。例えば、奈良県の月ヶ瀬村では、製茶を中心にして非常に活潑な活動をしている。その秘密は何か。ここでは、伝統的なムラの代表者と行政村としての村役場とが一つの共同の組織をもつていて、そこの話し合いの結論は、問題の性質に応じて、それぞれ村役場かムラへもつていくことになっている。つまり、行政村とムラ組織がうまく吻合している。また、製茶を中心に一種の機能集団が作られているが、その中での人と人との交わりは、むしろ伝統的集団の性格を強くもっている。共同出資者達の相互扶助には伝統的人間関係をうかがうことができる。伝統的集団と機能集団が相互にコンプレックスをなしており、そのことが新しい活力を生み出しているように感じられる。同じことは天理市の岩室でも感じだし、広島県の芸北町でも、地域の振興のためには旧来のムラ組織が核にならなければ実効が上がらないという指摘をうけた。私は地域複合をソーシャルなコンプレックスという意味で、グループとグループが溶け合いながら、そこから何かのものが生み出されていくものと考えている。

(余田) 今の事例で、リーダーはどのような性格の人か。

(坂本) 農業集団の中から自然に出てくるリーダーと各部落まわり持ちのリーダーがいる。

(余田) 行政側からの働きかけは。

(坂本) ない。ムラと行政側とで合同の組織をつくる。

(中野) ムラが存在しているかぎり、どの時代でも今いわれたような在り方をしてきたのではない。ムラが有効であるのは、それがそれぞれの時代に適合しているからであつて、たとえば、資本主義社会におけるムラは、その体制に適合しながら生き続けてきたと考えるべきだろう。したがつて、エコノミック アンド ソーシヤル コンプレックスの形をつねにとつていたからムラは現代でも存続しえたともいえるのではない。

(中田) ろば懇談会の活動について、最近、地域で解決できる問題が次第に減じているという発言があつた。それは、ろば懇の運営あるいはリーダーに問題があつたからか。もつと別の要因が考えられるのか。

(坂本) リーダーは優秀であつても、地域内で解決できる問題には限界がある。たとえば、道路や橋の問題は村レベルを超えた問題になる。

(中田) ろば懇で取り上げられて解決した具体的な事例を教えてください。

(坂本) 問題を解決した事例と解決はしなかつたが突き上げをした事例とがある。前者は、ムラ祭りの復活とか溝掃除など日常的な事例で、これは数限りなくある。後者では、火力発電所やダム建

設への反対運動などがあり、住民運動的なものに発展した事例もある。

(中野) 自主ろば懇ができたというのは非常に意義が大きい。成立の条件として、工業化、都市化などが考えられるのか。

(坂本) 同じ工業化のインパクトでも、農村地域の条件によつて、その強弱は異なる。解決できる問題(たとえば、老人や子ども地域福祉など)がある場合には自主ろば懇は形成されやすいが、解決の困難な問題をかかえる場合には成り立ちにくい。

(山岡) 現在、各地で「ふる里運動」が展開されているが、その中から坂本先生がいわれるような地域主義が成長する可能性はあるか。また可能にしうる条件は何か。

(坂本) 地域主義はシャルル・ブリュンのいうようにイズムではなく方法だと理解している。つまり固定化された定義を下すのではなく、条件の変化に応じて変化する戦略方法を意味するものと思ふ。しかし、明治以来のセントラリズムに対するデセントラリズムという理念は変わらない。そこに問題が生ずる。例えば、二つ県を結ぶ道路を建設する場合、一方の県にとつてのメリットは考えるが、他方の県との関係までは考慮しないということが起りうる。つまり、二つの県の共存のシステムを考えなければならぬ。自分の属する県のことのみを考えるのは、むしろ郷土主義といつてよい。一種の地域的共存システムから考えていくのが地域主義の理念ではないか。

(高山) 先生のお話しの背後には、パラダイムの転換というお考えがあるように思われる。そこで、つぎのような問題が浮び上が

る。つまり、伝統的な共同体システムを活用する、とはどのような意味をもっているのか。個別化が進行するということは解体を意味している。解体されたからこそ新しい活用ということがいえる。そうすると古いものは否定されて、新しい基盤で新しい関係をつくっていくようにするのか。あるいは、伝統的さものを受け継ぐ形で新しい展望を考えるのか。さらにいえば、マルクスのザスーリツチへの手紙にみられるように、共同体の再生という形で新しい社会を展望するのか。この問題についてどう考えるかということが、農村自治についての考察の一つのポイントになるように思われる。この問題も含めた今後の討議が必要だと思う。(討論をまとめるにあたって、個々の発言の論旨をかなり圧縮したことをお断りします。光吉)